

『オートエスノグラフィー・マッピング：
「私」からはじめる研究手法を知るための地図』
土元哲平*・桂悠介**・サトウタツヤ*** 編、新曜社、2025 年

楠見 友輔†

I. 本書の位置づけ

オートエスノグラフィ（以下、AE）という語は、今日、着実に広まりをみせている。国内の研究者による学術書が複数出版されるようになっており、AE の理論や方法を解説した主要図書の邦訳もみられるようになった。日本質的心理学会第 22 回大会（2025 年度）では、AE や当事者研究に関する 10 を超えるポスター発表がみられた。しかし、社会科学全体の中では、まだ十分にその意義が理解されているとは言い難く、学位論文や査読論文に用いようとしても、方法を否定されることが少なくない。本書はこのような状況とニーズのギャップを埋めることを目指して編まれている（iv 頁）。T. アダムズと S.H. ジョーンズと C. エリスによると（Adams, Jones & Ellis 2022: 3）、AE は、「オート（自己）」-「エスノ（文化）」-「グラフィ（表象、書くこと、物語）」の 3 要素で特徴づけられる。自分自身の経験や声をデータとするというその方法は、オーソドックスな社会科学研究と大きく異なっている（楠見 2024: 139 頁）。しかし、本書を読めば、その方法が、それを用いる研究者にとって必然的に導かれる形式であることが分かるだろう。

II. 本書の構成と「マッピング」という構想

本書は、第 I 部「オートエスノグラフィーのアイデア」（第 1 章）、第 II 部「オートエスノグラフィー・マッピング」（第 2～5 章）、第 III 部「オートエスノグラフィーをより深めるための重要概念」（第 6～8 章）、そして付録「よくある質問と答え（Q&A）」という構成である。

このうち、タイトルに含まれる「マッピング」は、主に第 II 部と対応している。編者らは、AE のアプローチを二つの軸（「公正・変革－発見・生成」と「共同性－特異性」）によって 4 象限に分け、さらに二つの軸（「表現の探究－事実性の探究」と「社会実践の探究－創発性の探究」）によって八つの領域に整理している。

第 II 部で取り上げられている 8 種類の AE の要点を確認しておきたい。

* 立命館大学 OIC 総合研究機構 特別招聘研究教員・准教授

** 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

*** 立命館大学総合心理学部 教授

† 信州大学教育学部 准教授

kusumi@shinshu-u.ac.jp

第2章が扱う領域は「表現の探究」で、「喚起的 AE」と「パフォーマンス AE」からなる。喚起的 AE は、「広い意味では本書で紹介する AE の大半をカバーしている」（12 頁）とされるように、AE の根本的な態度を体現するものであるが、本書では他のアプローチとの対比のために狭義に用いられている。それは、C. エリスと A.P. ボクナーによって確立された方法であり、当事者自身が一人称ナラティブで生きられた経験を記述し、読者との共感によるコミュニケーションを目指すものである。執筆担当の鈴木ちひろは、「共感（compassion）」こそが、喚起的 AE の倫理の基礎をなすとしている。

パフォーマンス AE とは、身体を通じて経験の意味を生み出す方法であり、オーディエンスとの対話を伴いながら社会変革を目指すものである。執筆担当の藤阪希海は、「指導死」の経験と教育実習における指導の痛みに向き合い、それを詩に変えた台本を演じることで、教育に潜む暴力を描き出した自身の卒業論文を例示している。

第3章は「社会実践の探究」を扱う領域で、「批判的 AE」と「協働的 AE」から構成される。批判的 AE とは、批判理論やポストコロニアリズムと関連する問題意識のもと、社会の不平等に挑み、声を奪われてきた者たちが反旗を翻すための方法として位置づけられる。執筆担当の大川ヘナンは、これを「権力構造」と「批判的考察」を鍵として説明し、石原真衣の『〈沈黙〉の自伝的民族誌』（2020 年）を例示している。

協働的 AE とは、複数のオートエスノグラファーによる共同研究の形式をとる。参加者は、研究者、対象者、協力者という複数の役割を同時に担い、対話を通じた AE によって社会的変革を目指す。執筆担当の中井好男は、コーダ（聴覚障害者の親を持つ聴者）である自身とソーダ（聴覚障害のあるきょうだいを持つ聴者）である丸田健太郎との協働的 AE を通じて、その特徴である多声性とパワーシェアリングを説明している。

第4章は、「事実性の探究」の領域であり、そこには「対話的 AE」と「分析的 AE」が含まれる。対話的 AE とは、研究者が協力者と対話をすることで AE を実施する方法であり、研究者は、「対話と内省の往来」を通じて自己を相対化しながら自己理解を深める。執筆担当の沖潮満里子は、障害のある妹の「きょうだい」としての自身の経験を振り返ろうとしたが、一人ではうまくいかなかった。そこで指導教員に語り、聞いてもらうという対話的 AE を実施するに至った。対話を重ねることで矛盾する自己認識や価値観の揺らぎが浮かび上がり、「自己を語り直すことの可能性」が生まれたと述べている。

分析的 AE とは、「完全な成員である研究者（CMR）」として対象集団に属しながら、社会科学的な厳密性と透明性を保ちつつ、個人の経験を社会現象の分析へとつなげるものである。喚起的 AE が普及する中で他の AE の流れが消滅することを懸念した L. アンダーソンが提案したもので、物語の力と分析的厳密さのバランスを追求する。執筆担当の濱名潔は、物語の力を重視するエリスらと学問的厳密さを追求するアンダーソンの立場の緊張関係を論じながら、分析的 AE は「学問的な正統性を保ちつつ、研究者の自己経験を活用するバランスを模索するものだ」（97 頁）と特徴づけている。

第5章は「創発性の探究」の領域で、「アブダクティブ AE」と「熟慮的 AE」から構成される。アブダクティブ AE とは、C.S. パースのアブダクション概念を AE に援用することで、日常や研究の過程で出会う不思議さや驚きを「つまずきのデータ」と見なし、その現象についての仮説を立てて説明を試みる中で、新たな視座や知見を生み出す方法である。執筆担当の桂悠介は、マリの農村での人とジン（妖霊）の関係を「つまずきのデータ」として、既存の理論的枠組みを問い直す仮説を導き出した実践を紹介している。

熟慮的 AE とは、J. ヴァルシナーの文化心理学を背景に、個人の経験の独自性から出発して、他者の経験とも結びつく一般性の探究へと向かう AE である。執筆担当の土元哲平は、キャリア支援における転機という個人的な「美的瞬間」から出発し、「転機を促すキャリア支援」という一般的なモデルを提案した自身による研究を紹介している。

以上の説明は、それぞれの AE の特徴について、執筆担当者が概説したものを更に要約したものである。したがって、上述した要約が該当する AE の特徴を網羅しているとは思えないように注意してほしい。

さらに編者らによると、このように AE を分類することにも留保が必要である。編者らは、多様な AE のアプローチを「細分化したり分断することが筆者らの意図ではないことを強く強調しておきたい」(15 頁)という。ここでの「マッピング」は、ドゥルーズとガタリが言うように、正確な複写としての「トレーシング」と対比されるものであり、AE の全体像を見渡しながら、研究者が自らの問いに応じて新たな可能性を切り拓くための創造的実践(楠見 2024: v 頁)として位置づけられているのである。

III. 本書の貢献

本書の対象読者は、「これから AE に取り組みたい人」、「既に AE を用いた研究を行っている人」、「AE に対して理解を深めたい、批判的検討を行いたい人」と書かれている(v-vi 頁)。本書の著者らの丁寧であるが情熱的な文体や言葉遣いからは、読者に対して、AE の魅力を伝えようという意図が感じられる。そうした本書の重要な貢献は、AE が本質的に有する意義を、幅広い読者に届ける点にあるだろう。

では AE の意義とは何か。鍵となるのは、「表象の危機」以来問い直されてきた「書くこと」(8 頁, 128 頁)への関心である。20 世紀末に客観的に書くことへの懐疑が噴出したことを受け、書くということは「誰が、誰を、どのように、何のために描くのか」(51 頁)という問いを含むものとなった。この問いの背後には、研究者と研究協力者の間に横たわる非対称な権力構造がある。「研究論文を書くときには、主観を排除し、客観性の担保に努めるべきである」(ii 頁)という一般的な前提は、研究者自身が優位な立場にあるという「立場性(ポジショナリティ)」(48 頁)を不可視にする働きを持っていた。AE はこのような「メタ・ルール」(100, 151, 186 頁)に挑戦するものである。さらに、第 6 章で栗原翔吾が指摘するように(131 頁)、生成 AI を用いて書くことが急速に広まる今日、こうした研究の批判性を保つことへの注意はますます重要となるだろう。

第 8 章で示される「関連領域」の多くは、こうした権力構造への批判に関連している。高柳瞭太が G.C. スピヴァクを挙げながら述べているように、抑圧された経験をもつ人々の声はしばしば打ち消されてきた。これに対して、AE はその人自身が語るという方法をとることで、従来の研究ではとりこぼされてきた人々の「生きられた経験」を「一人称ナラティブで記述」(22 頁)し、「共感」(30 頁)を響かせることで社会を変革する力をもつ。

ただし、こうした自身の経験を書くことは、研究に登場する他者への加害になる恐れがあるとともに(147, 152 頁)、「研究者自身への加害」(152 頁)や「トラウマの再体験」(160 頁)を引き起こす場合もある。これは、第 7 章で清田顕子が論じている「脆弱性」(158 頁)の問題である。そのため、AE には、通常の研究に求められる「手続き的な倫理」とは異なる「関係的倫理」(147, 187 頁)と「自己へのケア／倫理的配慮」(153, 187 頁)も求められる。しかし、こうした懸念ばかりではない。AE は、

声を奪われてきた当事者にとって、「癒し」(155, 189 頁)にもなりうるとされている。

以上のような AE は、社会科学研究のオーソドックスな方法から大きく逸脱したものとして映り、「ナルシスティックではないか」「客観性がないのではないか」などの否定的コメントを受けることが多い (iv, 132, 185 頁)。しかし、上述したような背景と動機をもつ AE は、AE という形式でしか扱えないような問題に取り組んでいるのである。本書の各章は、AE が受ける否定に向き合い、この形式でしか書けない声があるということを、説得的に示している。

IV. 本書への期待

編者らは、本書のマッピングが多様な AE を「細分化したり分断する」ことを意図していないと述べているが (15 頁)、この言葉をより大きな問題への示唆として受け取ることができるのではないだろうか。すなわち、質的研究を単なる「方法」として学ぶことの限界についての示唆と、質的研究、社会、ひいては科学研究そのものを問い直す契機として、である。

第2章から第5章に至る AE の多様な説明、第6章の記述の理論と方法、第7章の課題と意義、第8章の関連領域のどれをとっても、方法のマニュアル的な紹介に留まっているものはない。各章から伝わってくるのは、著者らがそれぞれの問題関心に向き合う中で、その方法が導かれたということである。つまり、AE は、オーソドックスな質的研究法では扱えない問題関心に向き合うことから生まれたものであり、それゆえにその実践は必然的に「質的研究とは何か」「社会科学とは何か」「科学とは何か」という根本的な問いが含まれている。

こうした問いを内包する本書は、AE に関心をもつ人びとを想定読者としているが、むしろ AE に親しみのない読者にこそ届けたい一冊である。そこから、研究とは何なのか、自分は研究を通してどのような社会を創ろうとしているのか、という問い返しが起こるかもしれない。本書を起点として、そうした議論が呼び起こされることを期待している。

参考文献

- Adams, Tony E., Stacy Holman Jones, and Carolyn Ellis. 2022. Introduction. *Making Sense and Taking Action: Creating a Caring Community of Autoethnographers*. In T. E. Adams, S. H. Jones, and C. Ellis (eds.), *Handbook of Autoethnography*, 2nd ed. Routledge, 1–19.
- 楠見友輔 (2024) 『アンラーニング質的研究：表象の危機と生成変化』新曜社.